琴似又一郎の写真について
―北海道大学附属図書館所蔵資料の再検討―

大坂　拓*

* 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター　Ainu Culture Research Center ,Hokkaido Museum ,004-0006 ,Sapporo ,Japan

はじめに

琴似又一郎 (1) は、1842（天保 13）年頃に石狩川中流域の下カハタ場所ウラシナイ（現樺戸郡浦臼町）に生まれ、10 代でイシカリ御用詰所の幕吏水野一郎右衛門に奉公したのち、1857（安政 4）年～ 1870（明治 3）年の間に札幌郡琴似村（現札幌市中央区）に移り、以後、奉公の経験により身につけた和語の実力を活かして、極めて積極的な行動を見せたことで著名な人物である［谷本 2003：106-109］。1872（明治 5）年には、東京に設置された開拓使第三官園で学ぶために上京し、2 年後の 1874（明治 7）年に琴似村に戻ったものの［広瀬 1996］、1878（明治 11）年には農事試験場（札幌官園）の設置に伴い立ち退きを求められ、篠路村番外地（現札幌市北区西茨戸）に移った［谷本 2018：98-99］。そののち、移転先が元開拓使高官の堀基に払い下げられ農場敷地となったことにより、1890（明治 23）年頃に石狩川・当別川の合流点付近へ再度の移転を強いられ、同地で没した［加藤 2017：93］。

琴似又一郎の歩みには、近世・近代移行期の急速な社会変化の中を卓越した才覚により乗り切ろうとした特殊性とともに、明治政府による場当たり的な同化教育や居住地からの強制的な排除という、北海道・樺太・千島各地で多くのアイヌ民族が直面した困難の「典型的」な側面が交差している。その行跡を一つひとつたどることは、琴似個人にとどまらず、アイヌ史を叙述するうえで大きな意義があるものと捉えられる。

しかし、こうした重要な人物であるにも関わらず、意外なことに、琴似の姿をおさめたとされる写真は『札幌区史』［札幌区 1911］という 1 冊の文献に依拠して特定されてきたに過ぎず、その記載が正確なものか否かについて確認されることもなかった。本稿では、『札幌区史』の記載の根拠となった資料を特定し、その再検討を通じて、従来の人物比定には誤りがあり、琴似又一郎とされてきた人物は別人であることを明らかにするとともに、琴似又一郎と考えられる人物を新たに特定する。

1. 琴似又一郎とされる人物写真とその課題

アイヌ語地名研究の碩学として知られる山田秀三は、1965（昭和 40）年刊行の『札幌のアイヌ地名を尋ねて』の中で、石狩川支流の琴似川筋に居住した人物として琴似又一郎の事跡を紹介し、乙名モニオマなどと並ぶ「札幌の事実上の最初の市民」であったと位置付けた［山田 1965：58］。あわせて、『札幌区史』に掲載された「東京仮学校に留学中のアイヌ人」（図 1）の中に琴似の姿を「発見」したとして、図 1 前列左から 4 人目に立つ人物を抜き出し、「琴似又市酋長の写真」として図示した［山田 1965：59］ (2)。これは『札幌区史』の写真に添えられた、「前列左より（中略）四番目琴似又市」というキャプションを参照したものと考えられる。

『札幌区史』及び同書に依拠した山田の見解は、現在に至るまで多数の文献で踏襲され定説化した観があるが (3)、根拠となったキャプションの記載が正確なものか否かについて、具体的な検証が加えられたことはこれまでない。無批判に依拠するのではなく、基礎的な事実を確認することが必要であろう。

2. 資料の検討

2.1『札幌区史』の根拠となった資料の特定とその内容

図 1 に示した『札幌区史』掲載写真のキャプションには、「農科大学所蔵」と記載されている。ここでの「農科大学」とは、1907（明治 40）年に札幌農学校から改称された東北帝国大学農科大学を指し、同校の後身にあたる北海道大学の附属図書館に、

（1）　琴似の名は近世期にはマタヱチと記されている［谷本 2018：97］。近代には又市、亦一郎などと表記されることもあるが、開拓使が作成した名簿や北海道庁の土地関連文書では又一郎の表記が多用されていることから、本稿ではこれに従った。

（2）　「酋長」の語の使用は避けるべきだが、ここでは研究史上の意味合いを尊重してそのまま用いた。山田は後年、同写真を再録するにあたってキャプションを「琴似又市さん」としている［山田 1986：207］。

（3）　一例として、高倉新一郎は 1981 年刊行の『北海道大百科事典』に執筆した「琴似又市」の項目で、琴似の肖像として同じ人物の写真を示している［高倉 1981］。

図 1. 前列左から 4 人目を琴似とする『札幌区史』［札幌区 1911］の記載
（国立国会図書館ウェブサイトより転載）

現在も同一資料とみられる写真が所蔵されていることを確認した（図 2）[4]。写真の裏面には、左右上方に切手状のラベルが貼付されており（図 3）、そのうち左側のラベルは、開拓使札幌本庁が 1877（明治 10）年に設置した札幌博物場が、1884（明治 17）年に札幌農学校に移管される以前の資料に散見されることが指摘されているタイプである［加藤 2004：38-40］[5]。裏面の中央付近に押された「札幌農学所属博物場」の印は、同館が札幌農学校所属博物館と改称される 1895（明治 28）年よりも以前のものである。以上の点から、この写真は被写体となったアイヌ民族が上京した 1872（明治 5）年以降に開拓使により撮影されたのち、札幌博物場の所蔵資料となり、組織の改編を経て、現在の附属図書館へと引き継がれてきたものと考えられる。

写真の表面には 15 名の人物が写っており、裏面には鉛筆で 14 名分の情報が書き込まれている。表面に写る 15 人のうち後列左から 4 人目の人物は、同館が所蔵する「第 3 号園詰農局諸官員之図」と題する写真の中に同一人物が確認できるから[6]、撮影に立ち会っていた和人官員と判断される。一方、裏面の記載は 3 名分がアイヌ名のみ、10 名分がアイヌ名と和名の組み合わせとなっており、「不分明」と記載された 1 名分にもアイヌ名・和名に対応する線が書き込まれている。裏面の記載は表面に写る 15 名から和人 1 名を除く、アイヌ民族 14 名分の人名が書き込まれたものと考えることが可能である[7]。

これらの人名が、どの時点で誰によって記入されたものかを厳密に特定し得る資料は得られていない。ただし、1895 年以前であることが確実視できる「札幌農学所属博物場」の印が、中央よりもやや上に偏して押印されているのは、「不分明」の文字を避け、かつ両側の人名にも影響しない位置が慎重に選ばれたためと考えられる。人名は、遅くとも 1895 年以前には記入されていたものと考えるのが妥当であろう。また、記載がどのような根拠に基づいてなされたかについては、被写体となった人物の和名の多くが不正確に表記されていることから、記入者が後年に何らかの資料を参照して転記した可能性は極めて低い。居住地の夕張郡に由来する「上夕張」・「下夕張」姓をそれぞれ「上由原」・「下湯原」と誤記している点は、記入者が上京したアイヌ民族に深く関与しておらず、北海道の郡名についても多くの知識を有しない人物であり、むしろ「聞こえるまま」に書き写した可能性を示唆している。被写体となった人物らに名前を確認した際に、夕張郡の語源となったアイヌ語地名 yupar（ユパㇻ）の発音で返答がなされ[8]、それを和語話者が書き写した結果、「張（はり）」ではなく「原（はら）」と記載された可能性もある。以上の点から筆者は、これらの人名が、写真の撮影・現像からそれほど間を置かない時点に、東京に滞在中のアイヌ民族本人に名前を聞き取りつつ書き加えられたものである蓋然性が高いと考える[9]。

2.2『札幌区史』掲載写真と関連資料の対比による人物比定の再検討

『札幌区史』に掲載された写真のキャプションには、「前列左より一番目山徳三郎、四番目琴似又市」と記載されている。現存する史料はいずれも徳三郎の姓を「矢間」としており、「山」としたものは図 3 以外に知られていないから、キャプションはまさに図 3 の記載を根拠としたものと考えられる。

（4）　北海道大学附属図書館所蔵（請求記号：P（a）150）。なお、以下本稿中で言及する同館所蔵資料は、全て「北海道大学北方資料データベース」（https://www2.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/）で高精細画像の閲覧及びダウンロードが可能である（2022 年 9 月 14 日現在）。

（5）　ラベルに関する情報は北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの加藤克先生よりご教示賜ったものである。併せて、右側のラベルについても、1890 年頃に札幌農学校の博物場で資料整理を行った際に利用されたものとのご教示を賜り、ここに記載することをお許しいただいた［加藤私信］。記して深く感謝申し上げる。

（6）　北海道大学附属図書館所蔵（請求記号：P（a）132）の左から 7 人目。

（7）　東京アイヌ史研究会がこの写真に関するやや踏み込んだ検討を試みており、撮影時期の比定などに学ぶべき部分が多いが、図 2 に映る人物を「全員、石狩・札幌・夕張のいずれかの郡出身の生徒であることが判明」したとする部分は［東京アイヌ史研究会編 2007：147］、図 3 に記載された人名との人数の食い違いに関する言及を欠いており、首肯できない。

（8）　夕張の語源にはいくつかの説があるが、ここではシューパロを「shi-yupar　本流の・夕張川」と解釈した山田秀三の説［山田 2000：64］に従った。

（9）　本文のように考えた場合、なぜ「不分明」と記載される人物が存在するのかが問題になるが、この点は後述（注 12）する。「イワウクテ」と「妻／ウテ『モン』ガ　モン」の 2 名分はペンで加筆されており、それぞれ下に薄く鉛筆で「イワフテ」、「女子　ウテ□ン」の文字が読み取れる。

図 2.「開拓使東京第 3 号園留学アイヌ人　其 2」（北海道大学附属図書館所蔵）

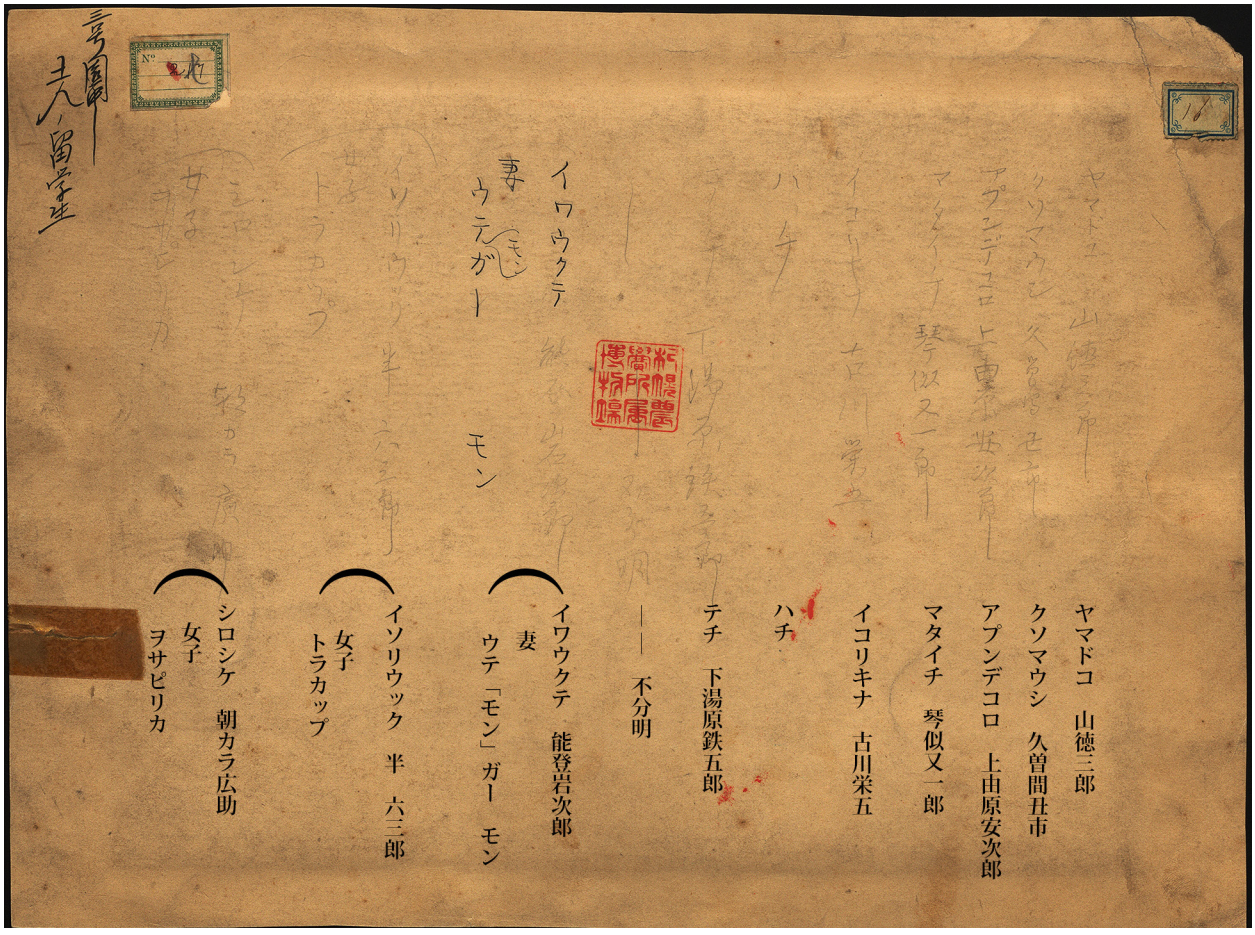

図 3.「開拓使東京第 3 号園留学アイヌ人　其 2」（北海道大学附属図書館所蔵）裏面の記載
（文字の判読を容易にするため明るさ・コントラストを加工し、翻刻を加筆）

ところが、図 3 を一見して明らかなように、人名は前列・後列を区別する形で記載されてはいない。仮に『札幌区史』の記載に従って、これらの人名を図 2 前列左からヤマドコ・クソマウシ・アプンデコロ・マタイチの順に対応するものと考えた場合には、6 ～ 8 人目には女性の人名が記載されていなければならないはずだが、実際には 6 人目のハチ、7 人目のテチはいずれも男性の名であり、齟齬を生じる。

図 2 の人物の配列を検証し得る資料として、1872（明治 5）年に「北海道土人教育所」の在籍者を撮影した 2 点の写真（図 4・5）の存在が明らかにされている［東京アイヌ史研究会編 2007：144-146］[10]。アイヌ名の表記には、図 3 と図 4・5 の間で若干の揺れがあるが、「イソリウック」と「イソリウ」、「トラカップ」と「トラカ」は和語に存在しない音節末子音（k・p）、「イワウクテ」と「イハオクテ」、「ヲサピリカ」と「ウサーピリカ」は、アイヌ語の u が和語の「ウ」とは異なりやや「オ」に近い[11]ことに起因するものと考えられ、いずれも同一の人名と判断して差し支えない。図 2 と図 4・5 を比較すると、図 2 前列左から 5 人目は図 4 の「ラウシ」、6 ～ 8 人目は図 5 の「ウテタモンガ」・「トラカ」・「ウサーピリカ」、後列左から 3 人目は図 4 の「ハチ」、5 ～ 7 人目は図 4 の「イハオクテ」・「イソリウ」・「シロスケ」である。図 3 の人名を、図 2 に写る人びとを前・後列を区別せずに左から順に記載したものと考えた場合にのみ、図 4・5 に名が記載された人物の位置との関係を矛盾なく説明することが可能になる（表）。逆説的になるが、こうした整然とした整理が可能という事実そのものが、図 2・4・5 に写る人物と、それぞれに記載された人名の対応関係の正確さを裏付けていると見なすこともできるだろう。

図 4. 男性集合写真（北海道大学附属図書館所蔵）

（10）　北海道大学附属図書館所蔵（請求記号：P（a）139・140）。いずれも裏面に図 2 と同様のラベルの貼付と「札幌農学所属博物場」の押印がある。なお、それぞれ裏面に「対雁に移住せし者」・「旧樺太土人女合写」の記載があるが、これが誤りであることは東京アイヌ史研究会が既に指摘している通りである。付け加えるならば、衣服の文様は後志地方の類例と極めて共通性が高いこと、男性の髪型は樺太アイヌの前頭部を剃り落とすものと明確に異なっていることが指摘できる。

（11）　田村すず子による、「u は、もっと口の奥のほうで発音するので、ウとオの中間のように聞こえることが多い」［田村 1996：ⅩⅤ］の記載を参照した。

図 5. 女性集合写真（北海道大学附属図書館所蔵）

表　「開拓使東京第 3 号園留学アイヌ人　其 2」裏面記載（図 3）と関連情報の関係

図 2			図 3	図 4・5	氏名	年齢
（左→右）	前列	後列	（右→左）			
1	1		ヤマドコ　山徳三郎		矢間徳三郎	33
2		1	クソマウシ　久曽間丑市		木杣卯七	35
3	2		アプンデコロ　上由原安次郎		夕張安次郎	38
4		2	マタイチ　琴似又一郎		琴似又一郎	32
5	3		イコリキナ　古川栄五		古川伊吾	34
6		3	ハチ	ハチ	石川八之助	23
7	4		テチ　下湯原鉄五郎		夕張鉄五郎	34
8		4	（和人官員）			
9	5		―　―　不分明	ラウシ	佐部雷次	21
10		5	イワウクテ　能登岩次郎	イハオクテ	能登岩次郎	24
11	6		ウテ「モン」ガ　モン	ウテタモンガ	能登茂武	17
12		6	イソリウック　半六三郎	イソリウ	半野六三郎	23
13	7		トラカップ	トラカ	半野登良	17
14		7	シロシケ　朝カラ広助	シロスケ	麻殻四郎助	21
15	8		ヲサピリカ	ウサーピリカ	うの	13

※氏名及び年齢は広瀬健一郎によるまとめ［広瀬 1996：表 1］及びその典拠である 1872（明治 5）年 6 月付「北海道土人男女二十七名、仮学校入寮・農業修業ノ為、上京ノ件」（北海道立文書館所蔵簿書：5733、46 件目）に綴られた名簿に依拠した。アイヌ名と和名の対比の一部は加藤好男によるまとめ［加藤 2017：43］を参照した。なお、夕張安次郎を「上夕張」姓、夕張鉄五郎を「下夕張」姓とする文書もある（北海道立文書館所蔵簿書：5529、69 件目）。

図 6.「開拓使東京第 3 号園留学アイヌ人　其 1」（北海道大学附属図書館所蔵）
（図 2・表との対比により氏名を記入した）

以上の検討から、琴似又一郎は図 2 左から 4 人目、後列左から 2 人目の人物であり、これまで琴似とされてきた前列左から 4 人目の人物は夕張鉄五郎である可能性が高いことが明らかになった。『札幌区史』の記述は、図 3 に記された人名の配列を読み誤り、全くの別人を琴似又一郎として示してしまっていたのである [(12)]。同書が刊行された 1911 年当時には、琴似ら被写体となったアイヌ民族を直接知る人物も少なくなかったはずで、にも関わらず、このような基礎的ともいえる事実の誤認が生じたことについては、やや理解しがたい印象は残る。十分な確認がなされないまま、上京したアイヌ民族の中で抜群の知名度を有する琴似又一郎が、集合写真の中央に立っているはず、という予断がはたらいてしまっていたのかもしれない。そして、誤りが訂正されないまま今日にまで至った理由については、他に確実に琴似又一郎と判断できる写真が未だ発見されていないうえ、写真裏面（図 3）に人名が記載されている事実そのものも広く知られてこなかったために、資料の比較検討による検証が困難だったためと考えられる。

関連資料として、図 2 に写る 15 人のうち 11 人が含まれる写真について、本稿での検討結果との対比をもとに人名を加筆したものを示しておく（図 6）[(13)]。図 6 の前列左から 4 人目の男性も、これまでしばしば琴似又一郎として紹介されてきた [(14)]。人物比定の根拠を明示した例はないが、『札幌区史』及び山田秀三の著作と対比して、図 2 前列左から 4 人目の人物と同一と判断したものと推測される。しかし実際には、この人物は図 2 と同じく夕張鉄五郎である可能性が高く、琴似又一郎は図 2 後列左から 2 人目に対応する、図 6 左端に立つ洋装の男性に比定される。

（12）　図 3 で「不分明」とされた人物はアイヌ名ラウシ、和名佐部雷次であった。佐部は上京後まもなく健康を害し、1873（明治 6）年 7 月には転送先の函館の病院で死去している（北海道立文書館所蔵簿書：5529、70 件目）。アイヌ民族は伝統的に、死者の名を口にすることを激しく忌避した。「不分明」と記載された理由として、佐部の死後に写真を見せられたアイヌ民族が、名前の回答を拒んだという可能性も考慮しておく必要があるだろう。仮にこの推定が正しければ、図 3 の人名が記入された時期は、佐部の死後、1874（明治 7）年 4 月の夕張安次郎の死去、同年 5 月の古川伊吾の死去以前に限定されることになる。

（13）　北海道大学附属図書館所蔵（請求記号：P（a）149）。図 2 とは一部の人物の着衣に違いがあることから、別の日に撮影されたとの推定が示されている［東京アイヌ史研究会編 2007：148］。

（14）　一例として、北海道庁総合政策部が 2019 年から 2020 年にかけて配布した「先人カード」のナンバー 13「琴似又市」がある。

おわりに

本稿では、琴似又一郎を写したとされてきた写真資料の再検討を通じて、先行研究の人物比定の問題点を示すとともに、従来、琴似又一郎とされてきた人物が別人の夕張鉄五郎の可能性が高いことを指摘し、琴似又一郎を新たに特定した。これまで提示されてきた琴似のイメージは、上京した同族の中央に堂々と立ち、「たっぷりとした厚司を着て、素脚ですっくと立」つ男性の「鋭い精悍な眼差し」［山田 1986：207］と結びつけて語られてきたといっていいだろう。図 2 では後列に控え、図 6 では洋装を着こなした琴似の姿は、そうした従来のイメージを塗り替える可能性を内包しているように思われる。

もちろん、写真の中で琴似が着用している洋装は官が支給したものである可能性が高く、撮影も官の監督下でなされたものである以上、そこに加わった作為を考慮することなしに安易な想像を広げることは、いかなる学問的な意義も持ち得ない、故人に対する冒涜に過ぎない。幸いなことに、札幌周辺のアイヌ民族の近代史については、1990 年代以降、加藤好男による入念な資料集成［加藤 1991・2017］、広瀬健一郎らによる先鋭的な取り組み［広瀬 1996，東京アイヌ史研究会編 2007］、谷本晃久による詳細な研究［谷本 2003・2018］など、数多くの成果が積み重ねられてきている。それらと照らし合わせることではじめて、写真の精緻な解釈が可能になるはずである。引き続き、個別実証的な検討を重ねていきたい。

謝辞

本稿執筆に際し、写真資料の掲載について北海道大学附属図書館、関連文書史料の閲覧について北海道立文書館のご高配を賜った。また、北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの加藤克先生と二名の査読者より極めて有益なご指摘を受け、本稿の記述を大きく補訂することができた。末筆ながら、記して深く感謝申し上げます。なお本稿は JSPS 科研費 JP18K12558「考古学的分析手法を導入した博物館収蔵アイヌ民具資料の基礎的研究」（研究代表者：大坂拓）による成果を含む。

引用・参考文献

加藤克 2004「札幌農学校所属博物館のアイヌ民族資料」『北大植物園研究紀要』第 4 号，pp.1-54.

加藤好男 1991『石狩アイヌ史資料集』私家版.

加藤好男 2017『19 世紀後半のサッポロ・イシカリのアイヌ民族』サッポロ堂書店.

狩野雄一・広瀬健一郎 2007「第二部　開拓使による東京でのアイヌ教育」東京アイヌ史研究会編 2007『《東京・イチャルパ》への道～明治初期における開拓使のアイヌ教育をめぐって～』東京アイヌ史研究会.

札幌区 1911『札幌区史』札幌区役所.

高倉新一郎 1935「能登酉雄談話聞書」『北海道社会事業』37 号，北海道社会事業協会.

高倉新一郎 1942『アイヌ政策史』日本評論社.

高倉新一郎 1972『新版 アイヌ政策史』三一書房.

高倉新一郎 1981「琴似又市」北海道新聞社編『北海道大百科事典』上巻，p.658.

田村すず子 1996『アイヌ語沙流方言辞典』草風館.

谷本晃久 2003「琴似又市と幕末・維新期のアイヌ社会」『平成 14 年度普及啓発セミナー報告集』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構，pp.105-111.

谷本晃久 2018「近代初頭における札幌本府膝下のアイヌ集落をめぐって―「琴似又市所有地」の地理的布置再考―」『北方人文研究』第 11 号，pp.95-109.

東京アイヌ史研究会編 2007『《東京・イチャルパ》への道～明治初期における開拓使のアイヌ教育をめぐって～』東京アイヌ史研究会.

広瀬健一郎 1996「開拓使仮学校附属北海道土人教育所と開拓使官園へのアイヌの強制就学に関する研究」『北海道大学教育学部紀要』第 72 号，pp.89-119.

北海道新聞社編 1993『北海道歴史人物事典』.

山田秀三 1965『札幌のアイヌ地名を尋ねて』楡書房.

山田秀三 1986『アイヌ語地名を歩く』北海道新聞社.

山田秀三 2000『北海道の地名－アイヌ語地名の研究　別巻』草風館（山田秀三 1994『北海道の地名』北海道新聞社の復刻）